

■トピックス

河口洋一郎教授（東京大学） 2013 年春の紫綬褒章受章



創刊より本誌表紙の CG 画像をお願いしている河口洋一郎先生（東京大学 教授）が、2013 年春の紫綬褒章を受章されました。今回の受章を記念して河口先生にご寄稿いただきました。

学会より、この度のご受章をお喜び申し上げますとともに、河口先生の今後のご健勝と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

学会誌委員長 小木哲朗

この度、芸術選奨文部科学大臣賞に引き続き、榮譽ある紫綬褒章を頂いた。この受章は、学生時代からの CG 国際学会 SIGGRAPH 等を中心に展開している、論理的思考を基盤にした、プログラミングで自己増殖しながら形が変化していくコンピュータ・グラフィックス、“the GROWTH model”による芸術表現活動に始まり、特に平成 24 年度の伝統芸能とのコラボレーションや“GROWTH:Tendrils”についての展示、国内外での講演、近年の 5 億年後の人工生命体による宇宙芸術の可能性へと及んだ、一連の造形に対する論理的思考に裏打ちされた、顕著な芸術・教育活動の業績に対して、というものである。

近年は、国際宇宙ステーションで古川宇宙飛行士により抹茶をたてる実験を代表提案して実現したり、薩摩焼の第 15 代沈壽官など日本の伝統工芸の世界と共同制作を行ったりと、さらに創作活動の幅を広く展開している。また、鹿児島島の霧島アートの森の館長も務め、日本の価値ある伝統芸能を有効活用して、芸術文化をより一層盛り上げる活動も行っている。

深海宇宙への探検は、種子島で育った幼少の頃からの夢であり、今もなおその夢を実現すべく研究を続けている。未知の惑星旅行へ連れて行く新たな芸術生命体の仲間を創造するにはどうしたら良いのだろう。海中のサンゴ礁やウツボなど子どものころよく見た生物や風景が、創作の原動力になっている。新たな芸術生命体を考える根源的なアイデアを地球の自然、生物の進化に求めた。悠久の時間の流れの中での、生物の独自に進化を遂げた

形や色、動きの繊細で奇抜な魅力をどう芸術的に形象化できるのかを考えた。5 億年以上前のカンブリア紀から現在に至る、地球の生命進化をたどってみた。そこから未来の芸術生命体の進化を考えた。種子島から打ち上げられるロケットも、宇宙への夢へとより一層かきたてる。

これまでの研究領域である CG の世界のみならず、現実の世界で実現するために立体造形化し、さらにこれらの立体造形をロボットにして、時間と空間を乗り越え、遥かなる深海や宇宙へ連れて行きたい願望がある。そのための、創作に対するあくなき挑戦を続けていきたい。惑星や銀河、ザ・ユニバースの盛衰、ダークマターも含めて、いつか一緒にサバイバルをしたいものである。

河口洋一郎（東京大学）



Scissors Ficco（鋏宙魚）